

## 車依存からの脱却に向けた地方都市交通の再構築

ポンドストロベリー C1252377 古澤咲希

### A) 他チームの発表を聞いて

私たちの班では、地方における公共交通の不便さが車依存を招き、それが高齢者の免許返納の遅れや環境問題につながるという「悪循環」の構造や、地域全体で選択肢を広げる必要性があるということを主に論じている。一方で40班の「C4」の方々は私たちが着目していなかった視点である、「交通安全の具体的な環境整備」「弱者保護」「インフラ整備に伴う現実的課題」が示されていた。

特に、自動車・自転車・歩行者の動機を明確に分離し交差点の安全性を高めることで事故件数や重症事故を減少させるという取り組みとその効果が具体的に述べられている点では私たちの班よりも問題意識をより実践的に熟考していると感じた。また、高齢者や子供といった交通弱者の安全確保を中心に捉えている点も、生活の質向上という観点から重要であると感じた。加えて、インフラ整備には多額の費用や時間が必要であり、車利用者の反発、公共交通の運営コスト、住民の理解不足といった現実的な課題が存在することを地域の状況に応じて段階的に進める必要があるという考えも私たちの班には見られない具体的な政策運営上の視点として述べられていた。これらの点は理想論に留まらず、実行可能性を考慮した交通施策の重要性を示していると感じ想像しやすいプランであったためとても参考になった。

### B) 地方都市における交通の問題を総合的に解決するための自分の意見

地方都市における交通問題は、単なる移動手段の不便さに留まらず、高齢者の事故増加、免許返納の遅れ、若者の流出、地域経済の停滞など、さまざまな社会問題と連鎖していると思う。公共交通の本数が少なく、路線の範囲も限られているため、住民は車に依存せざるを得ず、その結果、公共交通の利用者は減少し、運行本数の削減や路線廃止が進むという悪循環が生じている。この構造を転換しない限り地方都市の持続可能性は確保できないだろう。

例えば酒田市では、市内循環を担う「るんるんバス」が運行されているものの大学線の最終

便は18時台～19時台と早く、アルバイトや課外活動を終えた学生が利用するには不十分である。夜間の便が少ないことは、若者にとって公共交通が「使えない存在」になって結果的に自家用車依存を強める要因となっている。また、三川方面への路線バスが減便・廃止の危機にあるように、利用者減少はそのまま路線存続の問題に直結し、高齢者や学生など車を自由に使えない層の移動の自由を奪うことになる。

このような状況を改善するためには、次の3つの改善すべき点があると考えた。第1に運行形態の柔軟化と効率化である。需要が少ない時間帯に大型バスを運行するのではなく、るんるんバスで一部導入されているワゴン車のような小型車両を活用することで、燃費や人件費を抑えつつ本数を確保できる。また、AIを用いて時間帯別・地域別の利用データを分析し、通学・買い物等のピークに合わせたダイヤ編成やルート最適化を行うことで、運行の無駄を減らし、収支構造の改善につなげることができると思う。

第2に、利用促進のための制度的な支援が重要だと考える。学生割引や高齢者向け定期券、ポイント制度の導入は、公共交通を日常的に利用する動機を高める。特に高齢者に対しては、免許返納後の移動の不安を軽減することが不可欠であり、認知機能検査の説明会や安全運転講習とあわせて、公共交通の利用方法を丁寧に周知することで、「車を手放しても生活できる」という安心感を与えることができると思う。

第3に、交通政策を都市構造の改革と連動させる視点である。商業施設や医療機関、行政サービスが徒歩やバスでアクセス可能な範囲に集約されるコンパクトシティ化が進めば、移動距離そのものが短縮され、公共交通や徒歩、自転車による移動が現実的な選択肢になる。酒田市のように道路幅が比較的広い都市では、車道の一部を歩行者空間や自転車道に転換し、安全で多様な移動手段が共存する交通環境を整備することも可能であると思う。

これらの、政策には運行費用の増大や人手不足、住民負担への懸念といった課題が伴う。利用者が増えるまでの間は赤字が続く可能性も高く、短期的な採算性のみで評価すれば導入は困難である。しかし、公共交通は単なるサービスではなく、地域の安全と生活の質を支える社会基盤であると思う。三川行きのバスのような路線が失われれば、高齢者の通院や買い物、学生の通学の自由が制限され、地域の活力そのものが低下してしまう。

以上より、地方都市における交通問題を総合的に解決するためには、ワゴン車や AI を活用した効率的運行、料金制度による利用促進、免許返納を支える仕組み、そしてコンパクトシティによる都市構造の転換を段階的に進めることが不可欠であると考えます。るんるんバスや三川行きバスといった身近な交通機関を維持・発展させることは、高齢者や若者の移動の自由を守るだけでなく、車に依存しすぎない持続可能な地域社会を実現する第一歩であると思う。